

# 僕と未来とブエノスアイレス

2005(平成17)年12月22日鑑賞(東宝東和試写室)



監督・脚本・製作＝ダニエル・ブルマン／出演＝ダニエル・エンドレール／ホルヘ・デリーア／アドリアーナ・アイゼンベルグ／セルヒオ・ボリス／ロシータ・ロンドネル／メリナ・ペトリエラ／サロ・パンク／イサーク・ファヒン（ハビネット・ピクチャーズ、アニメープラネット配給／2003年アルゼンチン・フランス・イタリア・スペイン合作映画／100分）

……長ったらしい邦題どおりの映画だが、これが第54回ベルリン国際映画祭で審査員特別大賞と最優秀男優賞を受賞！ 舞台はアルゼンチンの下町の商店街（ガレリア）。そこで生活する多国籍（？）の人々の姿を、繊細な若者の目を通して描き、親子の絆の大切さをしっとりと感じさせてくれる好作品。しかし、主人公がなぜポーランドへの移住を希望するのか、また父親はなぜイスラエルでの戦争に行ったのかなど、島国ニッポン人には理解困難な部分が多いため、かなり勉強が必要かも……？

## これはアルゼンチン映画の名作！

この映画は第77回アカデミー賞外国語映画賞のアルゼンチン代表作品として選ばれたもの。そしてまた、第54回ベルリン国際映画祭で審査員特別大賞と最優秀男優賞をダブル受賞したもの。しかし前宣伝が全くなかったため、私には何を描いた映画かサッパリわからなかったが、この映画を観るとその内容は、その邦題どおり「僕と未来とブエノスアイレス」そのもの。

つまり、アルゼンチンの首都ブエノスアイレスの下町にあるガレリア（商店街）を舞台とし、主人公の僕ことアリエル・マカロフ（ダニエル・エンドレール）の人生とその未来を描くものだ。

## 「遠くて遠い国」アルゼンチン……？

パンフレットには、「アルゼンチンといえばタンゴ、サッカー、もしくはパタ

ゴニアの自然などが思い浮かぶ」と書かれてある。たしかに私はアルゼンチン  
ンゴはすぐに思い浮かぶが、残念ながらバタゴニアの自然は思い浮かばないし、  
サッカーもあまりなじみがない。もっとも映画好きの私は、王家衛監督ウォン・カーウアイの、  
トニー・レオントニー・レオン レスリー・チャンレスリー・チャンの2人が共演したちょっと変わった映画『ブエノスアイレス』  
(97年)をすぐに思い出したが……。

「遠くて近い」「近くて遠い」という形容詞はよく使われるが、多分日本人にと  
ってアルゼンチンは、「遠くて遠い」国……？

## アルゼンチンとヨーロッパ

この映画を理解するためには、パンフレットをよく読んで、アルゼンチンとい  
う国の特徴を掘り下げて勉強する必要がある。

その第1は、アルゼンチンはヨーロッパの鏡像、写しだと言われ、ラテンアメ  
リカの中ではアルゼンチンは例外的に白人系の比率が多く、その大部分がスペ  
インとイタリアからの移民だということ。

もちろんその他にも、ドイツ系、イギリス系、フランス系、そして東欧系など  
さまざまなルーツを持つ人々もいるが、とにかくアルゼンチンはヨーロッパとの  
接点が多いため、アルゼンチンに住む多くの人々が「ヨーロッパに移住すること  
によって新しい生活を夢見る集団幻想に駆られていた」ということだ。知らなかつ  
たナア……？

## アルゼンチンとユダヤ人

第2は、アルゼンチンのユダヤ人は全人口の2%を占め、世界で7番目に大き  
いユダヤ・コミュニティが存在するとのこと。中でもこの映画の舞台となったブ  
エノスアイレスのユダヤ人街オンセ (Once) 地区は南米最大のユダヤ人居住区  
といわれるとのこと。

そういう前提知識がなければ、父親のエリアス (ホルヘ・デリーア) が赤ちゃ  
んのアリエルをユダヤ司祭の手によって割礼してもらっていることの意味もわか  
らないはず。さらに、その父親がイスラエルへ戦争に行ったきり、なぜ戻ってこ  
ないのかもわからないはず……。

## アルゼンチンとポーランド

第3に大切なことは、この映画の冒頭、既に30歳となっているアリエルが語る「祖父母の母国であるポーランドのパスポートをとってヨーロッパに移住しようと考えている」ことの意味を理解することだ。なぜ祖父母がポーランドからブエノスアイレスへ来たのか。それを知るためには、1939年のナチスドイツによるポーランドへの侵攻とユダヤ人大虐殺を含めたポーランドの不幸という歴史上の事実思いをめぐらすことが必要だ。この映画ではそれが詳しく語られることはないが、それはアリエルの祖父母たちポーランド人は誰もが知っているが語りたくない過去の体験だからだ。しかし日本人の私たちがこの映画を理解するためには、そういう歴史の学習が不可欠……。

## キャラ豊かなガレリアの人々たち

アリエルが紹介するガレリアで働く人々は、それぞれ個性豊かなキャラを持った人物ばかり。ブエノスアイレスのユダヤ人街にあるガレリアで働く人々の日常生活を見ているだけでも楽しいことはまちがいないが、残念ながら日本人にはそれが少しわかりづらい……。特にその生活ぶりを描くについて大きなウエイトを占める別の商店街ともめごとや、それを100メートル競走で決着をつけることになったいきさつ、さらにはその闘いぶりなどが少しわかりづらいのが難点……。

ここではいちいち紹介しないが、ガレリアで働くたくさんの多国籍の登場人物たちの営みの中から、その楽しさや人情、そして息づかいを感じ取ってもらいたいものだが……。

## 主人公は既に30歳……？

一人称の語りで始まる僕こと主人公のアリエルは今、母親のソニア（アドリアーナ・アイゼンベルグ）が営むランジェリーショップを手伝っている。しかし、同じガレリア内で雑貨屋を営む兄ジョセフ（セルヒオ・ボリス）のように独立もできず、中途半端な生活を送っている様子。今風の日本でいえばさしずめニート……？

しかしそんなアリエルも既に30歳。いい加減身を固めて独立しなければならない立場だが、昔の彼女のエステラ（メリナ・ベトリエラ）は、今は他の男の子供をお腹の中に……。 「僕はほんの少し自分の時間を生きてくて結婚の決心がつかなかっただけなのに……」などと今更言っても、後の祭りというものだ。

そんなアリエルは、幼い頃イスラエルへ戦争に行ってしまったきり戻ってこない父親のことをホームビデオで観て思い出したり、ポーランド人になるための手続に精を出してみたりしているだけ……。これではちょっと……？

## 突然オヤジが帰ってきた！

前半の、僕が目によるガレリアでの人々の生活ぶりの紹介が終わると、映画の後半は突然父親と息子との対決と対話がテーマとなってくる。すなわち、100メートル競走の日、何とアリエルは一目見てすぐにそれとわかる父親エリアスの姿を見つけたのだ。父親は右腕を失っていたが、なぜ突然戻ってきたのだろうか？ そのため、僕の心が乱れに乱れることになってしまったのは当然……。

## 今明らかになる驚愕の真実とは……？

僕の中から見ても、最近の母親の様子はおかしかった。それは、第1にダンス仲間だった色男気取りのマルコス（サロ・パシク）の出入りが突然頻繁になったこと。ある時などマルコスは鼻歌まじりでプレゼントを持って店を訪れたことも……。もちろん僕はそれをはねつけてやったが……。

もう1つは、長年向かいの店で文具店を経営していたオスワルド（イサーク・ファヒン）が、店を売ると言い始めたことによって、なぜか母親がひどく動揺していたこと。それもこれもきっと母親が父親から、戻ってくるという連絡を受けたために違いない。だって何の連絡もないまま、突然戻ってくることは考えられないから。しかしそれをなぜ僕に内緒にしていたのか？ そんな僕からの追求の前に、母親が僕に語ってくれた驚愕の真実とは……？

## 歌手に復帰した祖母の歌は……？

僕がポーランド人になるためには、死んだ祖父の出生証明書を探し出してもら

わなければならない。そんな話を僕が祖母（ロシータ・ロンドネル）にすると、祖母もホントは話したくない昔話をやっと切り出してくれた。それによると、祖母は第2次大戦中にユダヤ人迫害を逃れてポーランドを脱出したとのこと。そして昔、ワルシャワのクラブで歌っていたとのこと。そんな昔を思い出しながら僕の目の前で昔の歌を歌った祖母は、何かに目覚めたかのようにその後また歌のレッスンをやり始め、今や立派なプロ歌手……。

この映画のラストで彼女が悲しく歌う歌の迫力は、それを体験した人間だけにしか出せないもの。そして、僕は父親との確執や母親からの告白をどのように解決して、未来に向かってブエノスアイレスのまちの中で生きていくのだろうか……？

2005(平成17)年12月24日記

#### ミニコラム

### シャロン首相も遂にダウン

イスラエルのシャロン首相は昨年11月右派政党リクード党を脱退し、中道政党カディマを設立したが、1月4日突然脳出血で重体となった。3月末の総選挙ではカディマが大勝したが、職務遂行不能状態が100日以内に回復しなかったため、4月15日遂に復帰不能と認定された。

彼が日本でも有名なのは、1948年の第1次から1973年の第4次中東戦争までの間に見せた戦争の指揮ぶり、1977年に国会議員に転身した後の対パレスチナ強硬姿勢によるもの。そのため、昨年11月のガザ地区全域とヨルダン川西岸からの撤退という大きな路線

変更は、世界的に大きな注目を集めた。『アラビアのロレンス』を持ち出すまでもなく、中東問題が全世界の火薬庫であることは常識。昨今の原油価格の高騰は単なる経済問題にとどまらず、米国の世界戦略や米中のバランス論にも大きな影響を及ぼす世界的な大問題。

イスラエルやユダヤ人を描く映画を観る場合には、①キリスト教に対するユダヤ教という宗教上の視点、②ナチスヒトラーのユダヤ人観、③モーゼ以来の土地争いと戦後アメリカの援助によるイスラエル建国という政治的、軍事的な視点が不可欠だ。

2006(平成18)年4月20日記